

京都の歴史遺産と旅

—授業実践を踏まえた歴史地理学からの提案—

安藤 哲郎

- I. 提案の動機
- II. 提案へ向けて
 - (1) 歴史地理学からの社会へのアピールと活動
 - (2) 「修学旅行」へのアプローチ
 - (3) 京都の歴史遺産と修学旅行の事例
- III. 授業実践報告から
 - (1) 授業の実際
 - (2) 受講者の反応
- IV. 歴史遺産をめぐる旅への歴史地理学からの提案
 - (1) 受講者の反応にみる歴史地理学発展への寄与の可能性
 - (2) 旅への効果的な展開
- V. さらなる発展へ

I. 提案の動機

歴史地理学が学問の意義をどのように発信できるか、どのように社会に貢献できるかという命題が歴史地理学徒を悩ませて久しい。歴史地理学会が設立された時期に第一線で活躍していた藤岡は『多兎を追う者』のなかで以下のように述べている。

一般に歴史と異なって地理はまだ大衆化されず、一般人からの需要が少ないこと、日本人、ことに関西人は歴史や哲学が好きで、地理の好きな人々が少なく、

この点で地理の啓蒙の目的で書いたものも少なくない¹⁾。

地理学、とくに歴史地理学の現状は、その頃とあまり変わっていないと思われる。しかし、そのなかで少しでもアピールにつながるような、一般向けの講演やシンポジウムなどもよく行われている。

筆者も、歴史地理学からの発信を積極的に行いたいと考えており、実際に筆者の研究である「平安貴族の空間認識²⁾」を活かした形で、小・中学生や高校生向けの授業を実施したことがある。これを広く応用できるものにしていけないか、と考えたことが、今回の報告の契機となっている。

具体的には、「歴史遺産」をめぐる旅をより意義深いものにするために、「歴史遺産」が地域とどのように関わってきたのか、どのような場所として認識されてきたのか、といった点を知ってから訪れることがよいと思われるが、これに歴史地理学の立場から積極的に関与し貢献できないか、と考えた。このような方面に関心を寄せてきた歴史地理学の立場から、例えば、旅をする前に地形図や諸史料を提示しながら説明を行うことにより、その旅をより有意義にする提案はできないであろうか。

II. 提案へ向けて

(1) 歴史地理学からの社会へのアピールと活動

これまでに歴史地理学から社会に向けてのアピールや活動が行われたものとして、2006年6月に近江八幡市で行われた第49回歴史地理学会大会のシンポジウムが、「地域文化遺産としての歴史的景観—その保存と活用に関する歴史地理学からの提言—」と題して行われたことが挙げられよう。このシンポジウムの趣旨説明において、戸祭・内田は以下のように述べている。

歴史景観ないし歴史的景観を主要な対象の一つとして長年にわたって研究成果を積み重ねてきた歴史地理学界にとって、(中略) 学界の社会的な認知度をようやく正当なレベルに高める機会が到来したといえる。2005～2006年度における本学会の「景観の保存と活用の歴史地理」という共通課題は、地域の活性化、社会教育面での活用、一般社会への学問的発信など、私たちの学会による地域社会の貢献や連携に大きなステップとなるに違いないと信じる。³⁾

このように、歴史地理学の成果を発信することが大きな社会貢献につながる一方で、そこに至るまでの道のりが非常に長かったことがよく示されている。

もちろん、金田が「社会的発信のためには、当該分野のみならず、隣接・関連分野の評価が得られるような内実を備えた研究成果を創出することが基本的な要件」⁴⁾であり、「歴史地理学研究者による、独創性の高い研究成果が関連の分野における評価を得、ひいてはさらに社会的・行政的課題に貢献するという形が本来の、かつ理想的な形」⁵⁾としていいることは当然で、これに努めることを大前提とすべきである。

しかし、例えば、『歴史地理教育』という「歴史教育者協議会(傍点は筆者)」の雑誌上で、601号から750号までの150号分には、「現地見学」「フィールドワーク」を行った記事が73件と、2号に1件の割合で掲載されていること⁶⁾から、歴史地理学はもう少しこのような「現地見学」などにも積極的に関わり、そのうえで「見て回ること」にとどまらず、地域の形成や構造を意識した巡検へ発展させるべきと考えられる。

さらに、社会人に向けてだけでなく、児童・生徒に歴史地理学という分野があることを知ってもらうことには、積極的であるべきと考える。これが分野に人を増やし、競争力の上昇や共同研究の機会の増加などにつながり、ひいては独創性の高い研究が生まれる土壌をつくるのではないかと思われるからである。

(2) 「修学旅行」へのアプローチ

前項の最後に、児童・生徒に知ってもらうことが重要であると述べたが、筆者は、児童・生徒の修学旅行との関連で授業を行った。修学旅行に関する実践記録や論考としては、雑誌『地理』に、佐藤⁷⁾が都立高校における修学旅行について、移動に苦心した時代、班別行動、あるいは地理的なコースの設定、体験型の修学旅行など、その移り変わりについて整理している。

筆者が行ったような事前の授業と関連させたものについては、飯塚⁸⁾が、中学において水俣への修学旅行の事前学習として公害学習に取り組み、また展覧会を見学し、現地実習のための準備をするなどを経て、現地訪問し、その後結果をまとめたことを報告している。また小松原⁹⁾は、高校において戦争と平和を考えるための現地学習として沖縄への修学旅行を行い、ホームルームでの資料講義・映像視聴による事前学習を行ったことなどを示している。ともに生徒の学習と強く結びついた修学旅行の実践報告である。

平和学習との関連はいくつか見られ、木村¹⁰⁾は高校生が工作用ミニ煉瓦と紙漉煉瓦を用いて原爆ドームを事前に製作し、それから修学旅行へ出かけたことを報告している。また飯田¹¹⁾は焼津市の小学生が地元の漁船であった第五福竜丸について学び、その後東京の展示館への修学旅行へ向かったことを記している。中山は、高校生の長崎への修学旅行の事前研修として原爆体験者の文章や現在の平和運動などから学んだことについて述べたほか¹²⁾、高校生の鹿児島県知覧への修学旅行に先立って日本史とホームルームの時間を用いて元特攻隊員の講演や映像視聴などを通じて学習したことを述べている¹³⁾。

その他、柴田¹⁴⁾はハワイへの修学旅行の事前学習の場として国立民族学博物館の活用をめざした報告を行い、濱尾¹⁵⁾は自然教育園の修学旅行での利用について、中学校では利用件数の半数を占めたが、小学校や高校では利用がなかったことなどを示した。

このように、従来、修学旅行について多くの報告が行われてきた。そして、事前学習の重要性についての言及が多くなされてきたが、これらは修学旅行を行う主体（小・中学校、高校）側からの話題提供であった。筆者の場合は、修学旅行と組み合わせることを、旅行の主体ではない立場から提案するものであり、従来の報告とは視点が異なる意味のある提言と考える。

(3) 京都の歴史遺産と修学旅行の事例

ここ10年間、総数で100万人前後の修学旅行生が京都を訪問しており、この中では、中学生が最も多く60万人前後となっている¹⁶⁾。そして、修学旅行生の出発地をみると(表1)、小学校では中部地方、中学校では関東地方、高校では東北地方が最多となっており、京都からの距離と学年が関係していることがうかがえる。修学旅行生の中で中学生が最も多いのは、当該人口が多い¹⁷⁾ 関東地方からの訪

表1 京都を訪れる修学旅行生の出発地(2010年)
(単位:%)

種別	第1位	第2位	第3位
小学校	中部(56.8)	近畿(18.0)	中国(14.7)
中学校	関東(58.4)	中部(17.5)	九州(13.1)
高校	東北(33.6)	関東(29.2)	北海道(24.6)

資料:「京都市観光調査年報(平成22年)」より作成。

問が最多であることが影響していると考えられる。中学生あるいは高校生は、すでに歴史や日本の地誌を詳しく学んでいる層であることから、訪問先として「歴史遺産」を選択する可能性も大きい。

では、実際にどのような場所に訪問しているのだろうか。修学旅行生の訪問先についての統計は管見の限り見当たらないが、「京都市観光調査年報(平成13~22年)」¹⁸⁾を参考に、修学旅行生の年代が含まれる19歳以下の主な観光客の訪問地を整理した(表2)。これらは、修学旅行生の訪問先そのものではないが、それに近い状況は示されていると考える。

表2によると、この10年間のほとんどの年次で「清水寺」が最も多くの人々が訪れた「歴史遺産」となっている。他には、「嵐山」「金閣寺」がほぼ毎年上位となっているほか、「銀閣寺」「八坂神社」「高台寺」「二条城」なども訪問者が多い。

これらは「歴史遺産」である寺社や旧跡であるが、19歳以下世代の訪問地としてすでに関心を寄せられていることがわかる。そこで、これらの訪問地に関わる歴史地理的な話題を提供すれば、旅をより意義あるものにする可能性が高い。

一方、表には「四条河原町」「京都駅ビル」など、ファッション・土産品を目的とする可能性の高い繁華街も含まれている。これらの場所は「歴史遺産」として訪問されているわけではないかもしれないが、街の形成過程や過去の土地利用に関わる内容などを話題とす

表2 19歳以下観光客の主な京都市内訪問地

(単位：%)

2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010年
清水寺 44.8	清水寺 57.1	清水寺 31.6	嵐山 52.0	清水寺 30.0	清水寺 47.9	清水寺 71.9	清水寺 52.6	清水寺 56.7	清水寺 55.1
金閣寺 37.9	二条城 42.9	嵐山 26.3	南禅寺 40.0	嵐山 15.0	金閣寺 18.0	金閣寺 54.0	金閣寺 40.3	金閣寺 35.4	金閣寺 32.3
嵐山 20.7	金閣寺 35.7	三十三間堂 26.3	清水寺 36.0	高台寺 15.0	嵐山 18.0	嵐山 36.0	嵐山 29.9	嵐山 30.5	嵐山 29.9
二条城 13.8	銀閣寺 28.6	金閣寺 15.8	金閣寺 36.0	銀閣寺 10.0	高台寺 18.0	八坂神社 36.0	八坂神社 27.9	八坂神社 19.5	四条河原町 19.8
銀閣寺 13.8	西本願寺 21.4	高台寺 15.8	銀閣寺 32.0	平安神宮 10.0	京都駅ビル 18.0	高台寺 36.0	高台寺 25.3	京都駅ビル 19.5	八坂神社 19.2
四条河原町 13.8	京都駅ビル 14.3	知恩院 10.5	高台寺 32.0	鞍馬・貴船 10.0	銀閣寺 12.0	四条河原町 36.0	四条河原町 22.1	高台寺 18.3	京都駅ビル 19.2
南禅寺 10.3	三十三間堂 14.3	天龍寺 10.5	八坂神社 24.0		平安神宮 12.0	大原 36.0	大原 22.1	東寺 18.3	二条城 16.2
			知恩院 16.0			京都駅ビル 36.0	東寺 20.8	二条城 15.2	東寺 16.2
			京都市 美術館 16.0			二条城 18.0	京都駅ビル 20.8	知恩院 13.4	知恩院 13.2
						銀閣寺 18.0	京都市 美術館 18.2	銀閣寺 12.2	銀閣寺 11.4
						南禅寺 18.0			平安神宮 11.4
						平安神宮 18.0			大原 11.4
						鞍馬・貴船 18.0			
						知恩院 18.0			
						龍安寺 18.0			

資料：「京都市観光調査年報（平成13～22年）」により作成。

注1）数値は、アンケート回答者全体のなかで当該地を訪問した人の割合を示す。

注2）上位10か所（同率を含む）のみを取り上げ、かつ10%以上の割合を示しているもののみを表に示した。

注3）複数回答があるため、合計は100%とはならない。

ることで、旅に新しい意味を付与できる可能性もある。

以上のことから、「修学旅行の事前学習」への工夫ができれば、100万人の児童・生徒の修学旅行を「歴史遺産」をめぐる旅に意味付け直すことができる可能性がある。

そこで次章では、筆者が京都の修学旅行と

関連させて行った授業を取り上げ、この方法に効果があるのか検証したい。

Ⅲ. 授業実践報告から

(1) 授業の実際

1) 授業の契機

筆者は、2011年5月から11月にかけて、

「スーパー・サイエンス・スクール事業～サイエンス・コミュニケーター・プロジェクト」(京都大学学務部)に参加した¹⁹⁾。この事業は、博士号を取得した若手研究者が全国の小学5・6年生や中学生、高校生に対して自身の研究を分かりやすく伝える授業を行うもので、文系・理系を問わず、20人ほどの参加者があった。

まず予定する内容を公開し、受講を希望する小・中・高校が申し込むということから授業へ向けた環境が整う。授業の形式は、先方の小・中・高校で行われる「出前授業」と、希望する学校の生徒・児童が京都大学を訪れて行われる「オープン授業」とがある(以下、総称して「出前授業」とする)。

筆者は、「平安貴族の考えた『京都』」と題し、平安時代の京都について、貴族社会の空間認識を交えた授業を行うように告知した。そして、小学校2校(愛知県豊川市立・岐阜市立)、中学校1校(熊本市・私立)、高校1校(大阪府立)の計4校を対象に授業を行った(表3に各校での授業の状況を示した)。うち、豊川市の小学校と熊本市の中学校は「出前授業」で、岐阜市の小学校と大阪府立の高校は「オープン授業」で実施された。

小・中学校については、授業の題目・内容の影響からか、京都への修学旅行中あるいは修学旅行を控える学校を対象とすることになった。さらに1校を除き、京都大学も修学旅行のルート上に設定された。また高校は、「大学訪問」の一環として京都大学を訪れて

いる最中に授業を行うこととなった。

2) 授業方法

授業は、地図を受講者の前に展示してその周りに座ってもらい、同時にPowerPointによるプレゼンテーションを参照してもらいながら進める形式を採用した。そのため、多目的ホールや会議室のような、可動機のある部屋での実施となった。展示する地図は、京都と周辺の仮製2万分1地形図²⁰⁾と最新の2万5千分1地形図²¹⁾の2種類を準備した。また、江戸時代に森幸安が平安時代から応仁の乱以前の京都を考証した「中古京師内外地図」も参考資料として適宜用意した。

ところで、表3に示した通り、受講人数に差がある。高校の22人の授業では、地図を1セットのみ広げたが、その他の授業では2セット準備し展示した。さらに、内容に関わる20か所前後のカラー写真を印刷したトレーシングペーパー製の写真立てを用意し、底に磁石を付け、両地図の該当箇所裏にも磁石を貼っておき、上から置いていった(図1)²²⁾。上に置く写真は自ら撮影したものを用いた。プレゼンテーションでは、写真(地図上に展示したものも含む)、作成した地図、説話や日記といった史料(現代語訳に切り替えられるようにしたものも含む)などを進行順に整理した。

授業時間は、50分×2時間を基本としたが、修学旅行中の小学校は60分×1時間で少し短く設定されることになった。授業のはじめに、『京都歴史アトラス』掲載の「人工衛

表3 「出前授業」の受講者と授業の状況

種別	実施日	所在・公私別	学年	形式	授業時間	人数	受講の契機
小学校	10月11日	愛知県豊川市立	6年	出前	50分×2	56	修学旅行を予定
小学校	10月13日	岐阜市立	6年	オープン	60分	46	修学旅行中
中学校	8月22日	熊本市・私立	2年	出前	50分×2	60	修学旅行を予定
高校	8月24日	大阪府立	1・2年	オープン	50分×2	22	大学訪問の一環

注)「実施日」は全て2011年。「形式」の“オープン”は京都大学構内で実施。



図1 地図の展示の様子

(2011年8月22日, 京都大学学務部撮影・提供)

星から見た京都²³⁾を用いながら京都の地勢について話をした。また、京都駅や京都タワー、東寺、金閣、銀閣、平安神宮などを示し、平安時代の当時からあったもの、平安京内に位置しているものなどを、展示地図も参考にしながら考えさせた²⁴⁾。

その後、いくつかの場所をトピック的に取り上げた。写真を画面に映し、地図上に置いた写真立てを参考に位置を確認させ、史料の現代語訳をアニメーション機能なども効果的に使いながら少しずつ示すなど、児童・生徒のペースに合わせて操作した。また、小学生に対しては人物画も用意し、説明に用いた。

授業で扱う歴史遺産・観光地は図2に示した通りであるが、修学旅行の行先、あるいは行先として想定している場所については、平

安時代との関連を問わず、授業で取り上げることとした。そのうち、創建時期が平安時代に遡る「歴史遺産」に関しては、できるだけ地形図上に写真を置くとともに、史料・古典を取り上げた。史料・古典は、貴族の記録や日記・説話を取り上げた²⁵⁾。その他、観光地としてよく訪問されている場所なども含めた。

(2) 受講者の反応

実際の授業に関しては、図3に一例を示したような形で行われた。メモを取ったり質問を受けたりするなども含めて、真剣にかつ楽しく受講してもらった印象がある。プロジェクトでは、授業後に受講者からアンケートを取るようになっていたが、このアンケートな

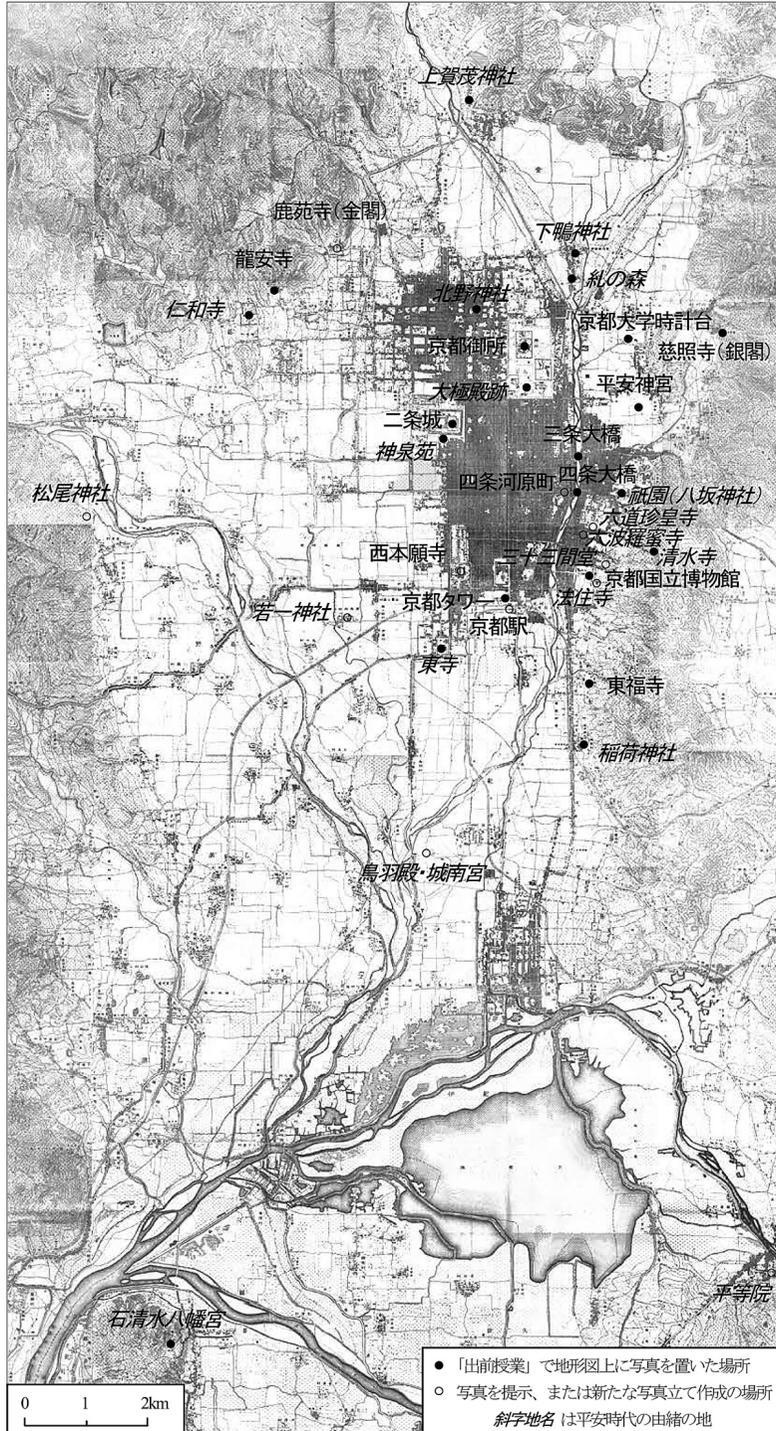


図2 「出前授業」で扱う京都の歴史遺産・観光地

(ベースマップは仮製2万分1地形図

「大原村」「大津」「鞍馬山」「京都」「細野村」「愛宕山」「醍醐村」「宇治」「伏見」「淀」「沓掛村」「山崎村) 」



図3 実際の授業の様子

(左：2011年8月22日「出前授業」、右：2011年10月13日「オープン授業」、ともに京都大学学務部撮影・提供)

どを基にして京都大学学務部により「事業報告書」が作成された²⁶⁾。以下、この報告書に基づいて論を展開したい。

授業に関しては、まず、技術的なことに関わる感想もいくつか得られた。例えば、スクリーンに映写している画面が、部屋の角度によっては見えにくかったという指摘もあり、会場設営に工夫するようにし、また、少し話すスピードが速いとの指摘もあったので、内容を時間と合わせて絞り込み、ゆっくり話せるようにするなど、4回の授業の中で修正することもあった。

また、地図の上の写真は片面印刷であったため、なるべく南側から地図を見るように座ってもらったが、部屋の都合で難しい場合、北の方向から見るように座った受講者があり、写真が見えにくかったケースもあった。これについては、4回の授業内では実現しなかったが、現在では、両面印刷を行い、両側から見えるように工夫をしている。

他方、PowerPointや緑色ポインター（京都大学備品）を使用したことは、小・中学生から好評を得た。機材をうまく利用しながら行うことはメリットも大きいと思われる。

次に、内容に関わるアンケートから、いくつか取り上げてみたい。

昔の地図と今の地図があったので比べることができて分かりやすかった。（小学生）

今と昔が比べられていてわかりやすかった。（小学生）

説話を使って寺や神社を紹介したところが、分かり易かったし、面白かった。（小学生）

以上の感想は、歴史地理的な説明を興味深く感じてもらい、現在と過去を比較しながら、対象とする地域について理解してもらう趣旨が伝わったものと言える。また、小学生（6年生）に対しても、この方法で理解を得られ、旅を前にした授業により、現在と過去の比較を興味深く感じてもらう効果があったことを示していると考えられる。

さらに、過去の様子を感じとることを実現し、自ら現在との比較を可能にしていくことを感じさせる内容もあった。

今の京都と照らし合わせて授業が進められていた点がとても分かりやすかった。当時の貴族の考え方も理解できた。（高校生）

説話で京都の当時の様子もわかったし自

分がその時の自分になったようだった。
(中学生)

以上の「その時の自分になったようである」という体験を、旅の中でも実現してもらえれば、さらに旅が魅力あるものへと発展する。そして、授業が旅と直接結びついていく可能性が感じられる。

写真で見た冬の銀閣寺がすごくきれいだったので、冬に行ってみたいと思った。(小学生)

どのお寺が大体どこにあるかを把握したので、修学旅行の時、お寺を見たら、一緒に今日の話の思い出そうと思う。(中学生)

これらの意見は、授業をきっかけに旅をより楽しくすることが可能であることをよく示している。このような授業が、旅に対して歴史地理学が貢献できるという側面を如実に示していると考えられる。

IV. 歴史遺産をめぐる旅への歴史地理からの提案

(1) 受講者の反応にみる歴史地理学発展への寄与の可能性

前章2節では、授業を通じて、受講者が歴史地理に興味を抱き、また旅を楽しむことができるように誘える可能性を感じさせるアンケート結果を示した。本節では、授業への反応を分析し、この授業からみた、今後の歴史地理学発展の可能性を探りたい。

まず、歴史地理の世界への興味・関心を広げ、学習意欲の向上へつなげるのではないかと推察される以下の意見があった。

京都には想像していたよりもお寺や神社などがあり、おどろいた。『京内』『帰京』などまだ知らない言葉がたくさん出

てきて楽しかった。(中学生)

授業は筆者の研究をベースにした内容で行ったので、「京内」「帰京」という用語を示したが、授業を写真・地図や映像などで視覚的に分かりやすくするなど工夫し、さまざまな内容に関心を寄せてもらえるようにすることが肝要であろう。

さらに、古典を用いていることで、以下の意見のように、古文の学習に興味を持たせるという副次的な効果もあった。

古文を習っているのも、もっと知りたいと思った。また、マンガや小説で出てきたお寺・神社もあったので、興味がわいた。(中学生)

このように学習者が古文と歴史遺産とを結び付けることができれば、古文をより実感をもって理解できるという側面もある。一方、歴史地理学から見ると、時代の異なるものを含めた古典を（あるいは近代以降の作品をも）扱うことで、関心を掘り起こせる可能性が示されている。

さて、筆者の関心は歴史地理学の発展にあるが、歴史地理学の魅力の発見、さらに地理と歴史を融合させた形での学習という方向へ展開することが期待される意見があった。

地理や歴史があまり好きではなかったけれど、今回の話を聞いて興味をもって、お寺ごとにある色々な説話なども一緒に調べてみたり、今の京都と重ねて地図を見たりするとすごく面白いと思った。(中学生)

このように地理や歴史にこれまで興味をもっていなかった生徒にも、歴史地理学に関心を寄せてもらい、積極的な学習行動へ結び付けられるのではないだろうか。そして、以

下のような意見があった。

地理と歴史を全く別の物としてとらえていたが、重ねてみると、地理だけとか、歴史だけ勉強するよりも楽しいことが分かった。(中学生)

これこそが、歴史地理学の真髄を表現しているのではないだろうか。歴史的な事績と過去の景観を合わせて扱えるのは歴史地理学の大きな特長であり、このことが中学生に理解を得られる可能性があるとするならば、筆者が行ったような行動を起こすことが何よりも求められる。

もちろん、歴史地理学は「地理学」であるので、現在の空間への視点が不可欠であり、それゆえに修学旅行で現在の景観を目の当たりにする児童・生徒にとって、大きな授業となりうるともいえる。すなわち、この授業ののちに行われる旅に関して、歴史地理学への関心を引き出し、過去と現在を比較しながらの旅に魅力を感じさせることができると考える。

(2) 旅への効果的な展開

この授業は様々な場面でできるが、最も効果的であるのは、修学旅行と関連づけて行う場合である。場所は、京都に限らず、「歴史遺産」を有する各地域において、学習的な要素も兼ね備えた旅ができると考えている。もちろん、対象としては、小・中学生に限らず、高校・大学生、さらに一般の人々にも可能であるが、児童・生徒の時期に魅力を感じてもらえることが、歴史地理学の発展にとってはより重要である。

具体的には、本稿で示したように、地形図(絵図・地図)を示し、そこに古記録・旅行記・文学などの記述を交えて、訪問地に関する立体的なイメージを膨らませてもらい、その後旅に出かけてもらうものである。ただ

し、実施に当たっては、「歴史遺産」を点的に取り上げるよりも、各「歴史遺産」が結びつく取り上げ方が望ましい。例えば、過去の「旅行記」のルート、あるいは貴族の実際の訪問ルート、『梁塵秘抄』などに描かれた参詣道などと関連させることで、よりリアリティを持たせた内容にできると考える。この点に関しては、「歴史遺産」をめぐる旅が「史跡めぐり」にとどまらないようにすることも念頭に置いている。そのために、町並みや過去に整備された道路なども話題に組み入れるようにしていくことが必要である。

一方、ルートが過去の記述にない場合は、テーマによって結びつける方法も考えられる。例えば、京都ならば「平清盛」に関連する場所²⁷⁾、行幸・御幸が行われた寺社などを設定し、独自に順番を考え、話を展開させれば、取り上げる「歴史遺産」が有機的に結びつくので、歴史地理学的な授業が展開しやすいのではないだろうか。

V. さらなる発展へ

以上に述べてきたように、筆者は歴史地理学を生かした「出前授業」と(修学)旅行を組み合わせた方法を、京都を題材に改良を加えながら経験を重ねてきた。

さらに筆者は、2012年5月末に、岐阜市立の小学生が再び修学旅行で京都大学を訪ねて来た際に、授業を行う機会を得た。このときは、小学校の学習内容などとも合わせたり、先述したように写真を両面印刷にしたり、修学旅行の訪問先に平等院が加わったのでその部分を追加したりするなど、授業内容を再構成して行った。

旅の前に古典や地形図・写真などを用いて歴史地理学的な授業を行うこの方法は、発表者が行った大学のアピールと結びつける展開はもちろんのこと、自治体の観光への取り組み、あるいは学会をあげた活動などと連関させることにより、発展の可能性が大いにある。

さらに、地理学習の面でも効果が期待できると考える。すなわち歴史地理学から「地誌学習」の発展に寄与し、「歴史地誌学」に結びつけられるのではないかと考える。「歴史地誌学」について、古田は、「時間軸を設定して、地域の景観と土地利用、資源の利用形態、産業活動、生活文化などの変化について明らかにすることにより、地域性を解明するアプローチ」とする²⁸⁾。

そして、歴史地誌学の意義については地理教育との関連で、「歴史的背景をふまえて地域性を追求し、地理及び歴史の基礎的な理解や認識をしたり、現代世界を時間的・空間的に認識することの重要性」²⁹⁾が指摘されている。筆者の方法は、平安時代に限らず、時間軸は広く設定することも動かすことも可能であり、地誌学習へ応用でき、歴史地誌へもつなげられると考える。

さらに、「旅」の発展として、「ツイン・タイム・トラベル」に結びつけることもできるのではないかと考えている。金坂が提唱する「ツイン・タイム・トラベル」は、「旅行記に描かれた旅の時空と自らの旅の時空を主体的に重ね合わせる旅」³⁰⁾と定義されている。そして、「自らの旅を過去の旅行記(古典)と結び合わせることによって自分だけの一過性の旅、消耗品としての旅に終わらない旅」³¹⁾と意味付けており、力点は現在の旅にある。

古典・記録を歴史地理的に読むことによって、現在の自らの旅がより魅力的で、実感の伴うものになっていけば、「ツイン・タイム・トラベル」へも、発表者が行ったような旅と結び付いた歴史地理的な授業実践からつなげられるのではないだろうか。

(京都大学研修員)

〔付記〕

京都大学学務部教務企画課の皆さんに、出前授業をはじめとしてお世話になり、また発表についても快諾いただいた。また、ご指導いただ

いている京都大学大学院人間・環境学研究科の小方登先生をはじめ、金坂清則先生(現名誉教授)、小島泰雄先生にお世話になった。この場を借りて御礼申し上げます。

本稿の内容は、2012年5月に新潟大学で行われた第55回歴史地理学会大会共同課題発表「旅・観光・歴史遺産」で報告したものを再構成した。

〔注〕

- 1) 藤岡謙二郎『多兎を追う者』大明堂、1974、51頁。
- 2) 筆者の研究に関しては、安藤哲郎「平安貴族における「京」の認識—日記の検討を通して—」歴史地理学53-2、2011、1-24頁、あるいは安藤哲郎「説話文学における舞台と内容の関連性—平安時代の都とその周辺を対象に—」人文地理60-1、2008、41-54頁を参照されたい。
- 3) 戸祭由美夫・内田忠賢「〔シンポジウム趣旨説明〕地域文化遺産としての歴史的景観—その保存と活用に関する歴史地理学からの提言—」歴史地理学49-1、2007、2-3頁。
- 4) 金田章裕「〔シンポジウム討論〕総合コメント」歴史地理学49-1、2007、95頁。
- 5) 前掲3) 98頁。
- 6) 「総目録 項目別索引(フィールドワーク・見学会・展示会)」『歴史地理教育』757、2010、74-77頁。
- 7) 佐藤仁朗「教育のなかの旅—修学旅行—」地理32-12、1987、71-77頁。
- 8) 飯塚和幸「水俣修学旅行への取り組み」地理57-2、2012、59-64頁。
- 9) 小松原 尚「リゾートブームの下の『地域活性化』—沖縄修学旅行を事例として—」地理36-11、1991、119-125頁。
- 10) 木村靖子「出会い 原爆ドームをつくって広島へ修学旅行—高校生の軌跡—」歴史地理教育648、2002、32-39頁。
- 11) 飯田 彰「第五福竜丸と平和学習」歴史地理教育646、2002、44-47頁。
- 12) 中山敬司「特別攻撃隊と向き合う授業—修学旅行事前研修を通して—」歴史地理教育706、2006、52-55頁。
- 13) 中山敬司「秋月辰一郎・岡まさはる・高校

- 生一万人署名—長崎修学旅行事前研修—
歴史地理教育726, 2008, 56-59頁。
- 14) 柴田 元「民博を修学旅行の事前学習に活用する—世界史Aの授業や『総合的な学習の時間』を通して—」国立民族学博物館調査報告56, 2005, 187-205頁。
 - 15) 濱尾章二「学校教育における自然教育園の利用—総合的な学習の時間の実施による変化—」自然教育園報告35, 2004, 15-22頁。
 - 16) 京都市産業観光局観光部観光企画課編「京都市観光調査年報（平成13~22年）」, 2002-2011, (http://raku.city.kyoto.jp/kanko_top/kanko_chosa.htmlより閲覧, 2012年4月15日最終確認)。
 - 17) 「平成22年国勢調査」によると, 5歳階級別にみた関東地方の10~14歳（中学生が含まれる）人口は1,846,979人で, 全国の同年齢人口の31.2%を占める。
 - 18) 前掲16)。観光客数, 観光客の動向（市内観光地, 観光消費など）, 外国人客・修学旅行生に関する調査を行っている。サンプル（直接面談）調査などによって実施しており, 具体的には「京都市内の主要な鉄道駅, 観光駐車場等, 全15箇所において, 調査時期, 曜日, 時間を概ね合わせたうえで, 無作為に調査対象者を抽出し, 面接聴取及び郵送回答の方法」（平成22年, 6頁）によるという。
 - 19) 2009年度から同様の事業が行われた（2012年度は行われていない）。
 - 20) 展示したのは, 「大原村」「大津」「醍醐村」「宇治」「鞍馬山」「京都」「伏見」「淀」「細野村」「愛宕山」「沓掛村」「山崎村」の12枚（縦4枚・横3枚）の範囲である。
 - 21) 展示したのは, 「京都東北部」「京都東南部」「宇治」「京都西北部」「京都西南部」「淀」の6枚（縦3枚・横2枚）の範囲である。
 - 22) 当時は片面に写真を印刷したものを使用していたが, 現在は両面に印刷し, また画像の見える角度を変え, 強度も上げたものを使用している（写真は当時のものを掲載している）。
 - 23) 足利健亮編『京都歴史アトラス』中央公論社, 1994, 9頁。
 - 24) 展示地図の上に, トレーシングペーパーに縮尺を合わせて印刷した平安京条坊モデルを置いた。
 - 25) ただし, 「石清水八幡宮」を取り上げる際に『徒然草』を用いた。
 - 26) 京都大学学務部・高等教育研究開発推進センター「平成23年度スーパー・サイエンス・スクール事業～サイエンス・コミュニケーター・プロジェクト～事業報告書」2012。
 - 27) 修学旅行との関連ではないが, 2012年4月30日に, 筆者は所属研究室で「平清盛」に関連する場所の巡検を企画・実施した（詳細は<http://www.hgeo.h.kyoto-u.ac.jp>以下に掲示）。その際, 平清盛の一生とその時代とを関連させ, 鳥羽殿跡から西八条第跡, 法住寺殿, 六波羅などの順番で回るコースを設定した。
 - 28) 古田悦造「地域の形成と変化—多摩地域の歴史地誌—」（矢ヶ崎典隆, 加賀美雅弘, 古田悦造編著『地誌学概論：地理学基礎シリーズ3』朝倉書店, 2007), 16-21頁。
 - 29) 岩崎公弥「古田悦造：歴史地誌学構築への試論」（2000年度大会特別研究発表—報告・討論の要旨および座長の所見—）人文地理53-1, 2001, 73-76頁。
 - 30) 金坂清則「旅行記と写真展（前編）—イザベラ・バード論の展開—」地理55-3, 2010, 96頁。
 - 31) 前掲30) 89頁。